

08・わたしは桐生が好き

とある年の秋。十月二十六日、火曜日。十七時半ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は曇り。気温は十五度程度。

雨こそ降っていないが肌寒い。

一年の中で、雪が降る直前のこの時期が一番寒く感じる気がする。

場所は、主人公が通う学校『公立 鵜』から徒歩で行けるところにあるショッピングモール『バアドモール 鵜中央店』のBタウン三階フードコート。

主人公は今、涼羽、由希乃と三人で集まっている。

とはいっても、これは楽しい会ではない。

三人の顔は一樣に暗く、まるでここだけ闇の世界である。

SE1 フードコートの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【▲1 まで流し続ける】

【0—5秒ほど流して『涼羽』のセリフ】

〈涼羽〉

「【とても心配そうに。

主人公を励ましている側なのに、自分の声まで暗い。

しかし、もともと声の調子が一定なので、そこまで露骨な印象にはならない】
せんぱーい。元気出して下さいよお……」

すっかり落ち込んでいる主人公に、涼羽が顔を覗き込んで話しかける。
主人公は今、隣に由希乃、向かいに涼羽が座る形で着席しているのだ。

〈由希乃〉

「【なんとか励まそうとしているが『カラ元気』感がある。

この件について、非常に責任を感じているので。

由希乃は『やはり自分が正直に七緒を誘えば、こんなこじれた事にはならなかった』と、
深く後悔している。

だから、せめてものお詫びに、今日は二人にいくらでも、好きなだけ奢るつもりである。だが、自分も含めて全員食欲がない。今のところ三人ともジュースを飲む程度で、せっかく主人公と涼羽の為に注文したたこ焼きも、まだほとんど残っている」

そうだよ。今日は全部あたしの奢り！

好きな物、何（なん）でも食べていいからさ」

〈涼羽〉

「【無理に明るい声を作って。

由希乃の好意をむげにしたくないし、主人公に少しでも元気になってほしいので】
うんうん。そうですよ！

こうおっしゃって下さってるんですし。食べましょ？ 先輩！」

〈主人公〉

「……あはっ。そうだよな」

主人公、二人の言葉を受け、先ほど買ってきてもらったたこ焼きを改めて見る。

それは、主人公が一番好きなレモンポン酢味だ。

おそらく、涼羽がそれとなく由希乃に伝えて買ってきてくれたのだろう。

つまりこの食べ物には、二人の優しさと厚意が詰まっていると言ってよかった。

〈主人公〉

「田中さん、ほんとありがとうございます。」

わたし、この店のたこ焼きで、レモンポン酢味が一番好きなんです。たくさんいただかなくっちゃ……」

だから主人公は串を握り、一つのたこ焼きに刺して食べようとする。

ふーふーと息を吹きかけて冷ましてから、口に入れてみる。

広がった味は、これまでここで何度も涼羽と食べてきた、慣れ親しんだものだ。だけど、今日のそれは少し熱すぎたのかもしれない。

一噛みしたら、思わず涙が溢れてきてしまった。

〈主人公〉

「……あ。」

ごめん。ごめんなさい……。ちよっと、熱かったみたいだ……」

〈涼羽〉

「少し驚き、とても悲しそうに。

涙を流す主人公を見て、自分も悲しくなったので」

……あっ……。

【涼羽まで泣きそうになって。

今の主人公が、とてもナーバスになっている事、それはふとした事で泣き出してしまう位のものである事を理解しているのだ。

それでも、泣いた理由を『たこ焼きが熱すぎたから』という事にする。

主人公への励ましが届かなかった事にシヨックを付けつつ、これを『妥当な反応だ』と
思っている」

そうですよね。たこ焼き。熱いですよね……」

〈主人公〉

「……はは。ちよつとな……」

〈由希乃〉

「優しく。

主人公の反応に、涼羽の言葉に『それはもつともだ』と同意して。

また、主人公が泣いている本当の理由を察しつつ、涼羽の話に合わせて『たこ焼きが熱

かったから』という事にする」

うんうん。ごめん。あたしが悪かった。

まだあつついよね。ほら、鼻かみな」

〈主人公〉

「すいません。ほんとに、ごめんなさい……」

主人公、由希乃が差し出したティッシュを受け取ると、素直に鼻をかむ。

だが、一度溢れた気持ちは収まらず、またとめどなく涙を流す。

失恋した。

好きな女の子に、きっぱりとふられた。

ただそれだけの事なのに、こんなに心配して、一緒に居てくれる人が二人もいて。好物まで奢ってもらっているのに、泣くだなんて。

つくづく贅沢がすぎる。今この瞬間だって、七緒は働いているはずなのに。そう思ったが、それでも止められなかった。

SE 2 由希乃が主人公の背中を『ぽん、ぽん』と叩く音

【最初から最後まで流す】

〈由希乃〉

「優しく、落ち着いて言葉をかける」

謝んなくていいから。ほら、好きなだけ泣きな」

それでも、主人公の新しい友人は優しい。

土曜の主人公の失敗を責めもせず、それどころか、すべての原因は自分にあると思っ
ているようだ。

由希乃は主人公達よりも、ずっと年上だ。

だが、出会った時からその差を意識する事なく、対等な友人のように接してくれる。

主人公はそんな由希乃の存在がありがたいし、だから、彼女が責任を感じない為にも、
しつかりしなければならぬと思うのだが……。

〈主人公〉

「ごめんなさい。うつ。うつ。うつ……」

今はそれが、どうしてもできなかった。

涙はあふれ続け、主人公の顔を濡らしていく。

二人の表情は曇り、重苦しい沈黙が訪れる。

〈涼羽〉

「【息づかいだけで表現する。

重苦しい、主人公を案じるため息。

由希乃に『謝らなくていい』と言われて尚謝り、泣いている主人公が、痛々しくてたまらないので」

……」

このように、この場に流れる空気はひどいものだった。

土曜日、主人公と七緒の間に何が起きたのか。それを、全員が共有しているからだ。

土曜日のデートの後、主人公は一人でみのり沢駅まで戻り、そこからバスに乗って一人で帰宅した。

みのり沢駅は大きな駅ではない。

その上、主人公達の街に戻るバスなんていくつもない。

だから、ほとんど同じタイミングで同じ場所に向かった以上、七緒と駅で出くわすのではないか。

もしかすると、同じバスに乗ってしまうのではないか。

そんな不安と期待が入り混じった気持ちで、主人公は駅にたどり着いた。だが、結局七緒を見かける事はなかった。

もしかしたら、主人公と鉢合わせしないように、どこかに隠れているのかもしれない。あるいは、また先ほどの電話の相手と話しているのかもしれない。

そう思うと主人公の胸は痛み、とめどなく涙が出てきた。

だが、もう一度会えた所で、七緒と何を話せばいいのかはわからなかった。会いたい気持ちはあったが、同じ位、会うのが怖かった。

その結果、しつこく探す事、も待つ事も出来ずにみのり沢を去ったのだ。

そんな主人公は、時を同じくして、七緒もまたずっと駅に居た事を知らない。

心のどこかで再会を期待して、ぼんやりと座り込んでいた事を知らない。

七緒はあれだけ冷たく別れを告げておいて、もし、バスや駅で無様にも再会してしまったら、その時はもうあきらめようと思っていた。

ただの偶然を運命と呼んで『不可抗力だ』と言い訳して。

主人公に嫌われるのを覚悟の上で、ちゃんと謝罪する。

『もう好きではない』と言ったのは嘘だと言って、本当の事を全部打ち明ける。そうしようと思ったのだ。

だから『こんな所に居たら、先輩に見つかっちゃう。早くどこかに隠れない』と思

ながら、主人公が乗るだろうバスが発車するまで、ずっと駅の同じ場所にいた。主人公が本気で探せばすぐ見つけられるような場所に、ずっと居たのだ。

それを主人公は知らない。自分は完全に七緒に愛想を尽かされ、関係はもはや修復不能である。そう思いながら、ここに座っていた。

〈由希乃〉

「咳払いして。ただし、わざとらしくなりすぎない程度に。

このまま雰囲気暗くなりすぎるのはいけないので」

んっ。んー。

【真面目なトーンで。

気を取り直そうと話題を変え、主人公ではなく、涼羽に話を振る。

今七緒の話を振るべきではない事はわかっている。

だが、それでもその後の七緒の動向について、非常に気になる点があるので。

由希乃は涼羽の事を『久我ちゃん』と呼ぶ】

そうだ久我（くが）ちゃん。なーちゃん、今日は学校来てたんでしょ？

こんな時に申し訳ないけど、どんな感じだったか聞いてもいいかな」

しかし、この三人でいる以上、七緒の話題を避けるのは難しい。

もちろん普段であれば、由希乃も涼羽も気を遣って触れずにいただろう。しかし、そうもしてられない事情が、今の三人にはあったのだ。

〈涼羽〉

「【歯切れ悪くなる。

涼羽もまた週明けから七緒の様子がおかしい事を理解しており、由希乃にはこれを早く説明すべきだと思っている。

しかし自分は『七緒と同じ学校の同じクラス』という立場でありながら、月曜日も、火曜日も、有力な情報を何も得られなかったのだ」

……はい。来てたんですけど。

「申し訳なさそうに。話すうちに、どんどん声が沈んでいく。

自分で自分が情けなくなってしまうてしまったので」

タイミング悪くて、全然話せなくて……。

月曜日お休みした理由も、結局わかんなかったんです。

昼休みも追っかけてたんですけど、先生とずっとお話してて……。

ごめんなさい……お役に立てなくて」

〈由希乃〉

「落ちていて涼羽を励ます。実際問題、涼羽に落ち度はないので。

また、気になる事とは言え、このタイミングでこの話題を振った自分にも責任はあると思っているのだ」

いやいやいや。久我ちゃんはないんにも悪くないから。

というか、あたしも今のあの子の事、ぜーんぜんわかんないから」

〈主人公〉

「でも」

〈由希乃〉

「『よくぞ発言してくれた』という感じで、優しく続きを促す。

主人公の方を見て頷いている。

主人公が会話に参加してくれるとは思っていなかったのだ。

そのため、主人公が何を言おうとしているのか、見当もつかないので」

主人公がこぼした一言に、由希乃がはっと顔をあげる。

目が合うと由希乃は『よくぞ発言してくれた』と言わんばかりの顔をしていて、主人公

は胸がぎゅつとなった。

〈主人公〉

「桐生さん、仕事は来てたんですよ？」

〈由希乃〉

「【同意して、少し声に熱が戻る。

由希乃も、この件が気になっているので。

また、主人公が会話に参加してくれて嬉しいので。

由希乃は『『学校は休むが、アルバイトに来る』』というのはどういう状況なのだろう』と不思議に思っている。また、そのせいで、七緒の様子がおかしいと気づくのが遅れたので」そう。そうなのよ。昨日、バイトは来てたのさ。

だから、当然学校も行ってると思うじゃない？

だからあんたらの話聞いて、あたしも驚いてるっつーか。

【涼羽をフオーロしたい。

なので、昨日の七緒とのかかわりについて話す】

あたしも久我ちゃんと同じでさあ。昨日は全然話せなかったんだ。帰りも、いつも通り送ったけど。

【※マークまで、だんだん声が沈んでいく。

情けなくなってくる。自分の勇気のない性格が申し訳ないので。

土曜日の夜には主人公から報告を受けたが、七緒は日曜日にもアルバイトが休みだった。

その上、連絡しても返事がなかったのだ。

そのため由希乃はこの件にシヨツクを受け、月曜日も、ほとんど会話できずに終わってしまったので」

なーちゃん、あたしの前だとめっちゃ普通だから……。

土曜の事も、聞く隙もなかったというか……」※

〈主人公〉

「そうかぁ……」

三人、七緒の不可解な行動に、揃って首を傾げる。

土曜日の七緒の発言からすると、七緒は日曜、月曜と、電話の相手に会っていたようだ。

その結果『日曜日はアルバイトも休みで、何をしていたのかは不明』『月曜日は、学校は休んだものの、アルバイトには来た』という、不可解な足取りをした事になる。

だが、電話の相手の正体はわかるはずもなく、本人に動向を聞く事もかなわなかった。だからどうしていたか、まるで不明なのだ。

一体七緒は、今何をして、何を考えてるのだろうか。

主人公としては、たとえ以前のような関係には戻れなくとも、七緒の事が好きだし、気がかりだ。

たとえ七緒が『もはや、主人公に話す筋合いはない』と思っていたとしても。

せめて涼羽や由希乃には現状を打ち明けてほしいし……可能であれば、自分は二人を通じて、七緒が元気にしているかどうかを知りたかった。

ほんの数日前まではずっと一緒に居て、絶えずやり取りしていた女の子が、今はどうしているかもわからない。

これは主人公にとって耐えがたく辛い事だったが、それは涼羽と由希乃も同じだろう。そう思うと、一人で落ち込んでる訳にはいかない。

もつとも、元気を取り戻したところで、これからすればいいのかわからないが……。

〈涼羽〉

「【前向きな話題に切り替えようとする。】

主人公と由希乃が落ち込んでしまっているの。

今までは主人公に共感しすぎて落ち込んでいた。だが、よく考えたら、土曜日の件に直接関係ない自分は、二人よりも比較的傷が浅いはずだと気づいたので。

『それなら、自分が前向きな方向に引っ張らなくてはならない』と感じたので」
あの。提案なんですけど」

〈主人公〉

「ん？」

しかし、ここで涼羽が手をあげる。
現状がわからないなりにできる事がある。そう言いたいようだ。

〈涼羽〉

「【今できる範囲で、具体的な施策を出す】

まずは、何（なん）で月曜日お休みしたのかを聞き出せるように頑張つて。

『なーちゃんが先輩を好きじゃなくなった』っていうのが本当かどうかは、もう少し様子を見てみませんか？

【涼羽としては、七緒が心変わりしたという事実が、とても信じられないので。
というか、確実に嘘だろうと思っているので。

土曜日、待ち合わせ十五分以上前に来て、お弁当まで作ってきて。トラブルの直前までは『一緒に泊まりたい』とまで言っはしゃいでいた子が、別れ際突然『もう会うのはよ

そう』などと言いつ出すなんて、明らかにおかしいので。

絶対に何か理由があるか、遊園地のチケットの件でショックを受けたゆえの、衝動的な発言だろうと思っているので」

なーちゃん、あんなに『先輩大好き』って感じだったのに。

急にそんな事言い出すなんて、変ですよ」

〈由希乃〉

「強く同意して。急に元気が出てくる。

由希乃も『この件についてだけは、絶対におかしいし、納得できない』と思っているので」

そうだよ！

「二つの『仮に』を強調する。

『これはあくまでたとえ話であり、現実の話ではない』と言いたいのので」
仮に。仮にだよ？　これが『他に好きな奴ができた』とかだったら。

「自信をもって言う。これは、由希乃なりに根拠がある意見なので。

実を言うと、この一か月ほどで、『好きな人がいるので交際できません』と告白を断る七緒を目撃した事があるので」

なーちゃんならそう言うと思うんだ？

「なのに、そうとはつきり断らず『やっぱり恋愛感情ではなかった気がする』という理由で済ませるのは、振る理由として抽象的すぎて、今一つ信用ならないと言いたい」でも『やっぱり違う』なんて、随分ボヤつとした振り方してるし。

「『やっぱりこれってさあ、絶対何かあるはずだよ』と言いかけた所で途切れる。美津子が近づいてきたので」
「やっぱりこれってさあ……」

主人公、ヒートアップする二人の議論を小さくなって聞いていたが、ここで、ふと会話は途切れた。

こちらに向かって、意外な人物が歩いてきたからだ。

SE3 美津子の足音

「最初から最後まで流す」

▲ ボイス加工あり

「少し遠くで聞こえる」

〈美津子〉

「【嬉しそうに。】

穏やかで間延びした、マイペースな口調で。

フードコートの中に、先日助けてくれた主人公を見つけ、嬉しくなって話しかけてくる。
なので、三人が深刻な雰囲気である事には、まったく気づいていない」

ああ………！」

〈主人公〉

「！」

その瞬間、主人公は驚きで息をのむ。

あわてて涙を拭くと会釈し、それから声をかけてくれた人物を、思わず、まじまじと見てしまう。

もう二度と会う事はないのではないかと思っていた人。

三週間前、七緒と一緒に出会ったおばあさん・美津子がそこに居たのだ。

〈由希乃〉

「美津子の存在に気づいて、きょとんとして。

由希乃と美津子とはこれが初対面である。

だが、職業柄、一瞬『ん？ どこかで会った事あるかな？ もしやうちのお客さん？』

と記憶をたどっていたので」
ん？」

▲ ボイス加工あり

「だんだん近づいてくる」

〈美津子〉

「主人公に話しかけている。

明るく、のんびりとした口調で。

やはり、三人が深刻な雰囲気である事など、まったく気付かずに話しかける」
あらあ。こんにちはあ！」

〈主人公〉

「こんにちは……！ お久しぶりです！」

▲ ここで『美津子』の声が通常の距離感になる

〈由希乃〉

「主人公に尋ねる。

自分ではなく、主人公に声をかけて来たのだとわかったので」

えっと。お知り合い？」

主人公、慌てて姿勢を正すと、ぺこぺこと何度もお辞儀をする。

しかし涼羽が『多分、いつものやつ。先輩が、前に助けた人に声をかけられてる』と状況を薄々察しているのに対し、由希乃はきよんとしている。

なので主人公は、急いで補足した。

美津子もそれに倣い、自己紹介をしてくれる。

〈主人公〉

「はい。あの、前に桐生さんと一緒にいた時にお会いして、道案内した方でして」

〈美津子〉

「【穏やかに間延びした調子で。】

主人公の言葉を受けて、由希乃と涼羽に自己紹介する」

そうなのよお。

【由希乃に向かって、主人公と出会った経緯を説明する。『この子』とは主人公の事】
前ねえ？ 道がわからなくて困ってた時に、この子に案内していたのだいの！

【主人公に話しかけている】

お久しぶり！ 奇遇ねえ。元気だったあ？」

〈主人公〉

「あ、はい。なんとかお陰様で……」

〈美津子〉

「『早速話がずれている。』

主人公達のテーブルにあるたこ焼きを見た途端、そちらに興味を惹かれてしまったので。今日は美津子なりに理由があって話しかけたのに、すでにそれを忘れそうになっている」
あら、たこ焼き！

そこのお店の。美味しいわよねえ。

あたしもよく孫と食べるのよお。気が合うわねえ！」

〈主人公〉

「あはは……。はい、おいしいですよね！」

主人公、苦笑いしつつも、どこかホッと心がほぐれる気がする。
マイペースな美津子と話していると、時が三週間前に戻ったような気がしたのだ。

しかし、それは錯覚で、時間は確かに進んでいる。

美津子は主人公に、三週間後の今でないとできない質問をする。

〈美津子〉

「【間延びしたマイペースな口調でありつつも『しまった。今日はさすがに、こんな話をしている場合ではない』という感じで。ここで、己の目的を思い出したので】

……あ。

【少し間をあけてから。少し真面目な口調になって。

のんびり屋な美津子でも『この件はとても大切なので、早く聞いておかなくてはならぬ』と知っているの。『あなた』は主人公を指している】

そうだ。あのね？

あたし、あなたに聞きたい事があったのよ」

〈主人公〉

「……え？」

〈美津子〉

「とても心配そうに、だが、少し説明不足に話す。

『あの子』とは七緒の事を指している。

美津子は、名前を出さなくとも、これだけで主人公には伝わると思っているので」

あの子、大丈夫？ お母さんの手術。無事に終わった？」

〈涼羽〉

「【絶句して。

『あの子』というあいまいな表現になってなお、それは七緒の事であると察したので」
え？」

〈美津子〉

「『あの子』について補足する。

説明不足に気づいて、美津子なりに、順を追って説明しようとする。

美津子は家族にもよく『説明不足で、話がわかりにくい』と指摘されるので。自分でもこれを変えていきたいとは思っているが、まだそれは改善しきれていない」

ほら、あの子よ。あの子！

【少し間をあけてから。

名前を思い出すのに時間がかかったので」

あの時あなたと一緒にいた……七緒ちゃん！

【K G Iとは、近隣の医療施設『K G I医療センター』の略。

引き続き『自分はずいぶんこのような質問をしたのか』と説明する為、順を追って説明する】

あたしねえ？ K G I（ケージーアイ）通ってて、昨日定期健診だったんだけど。

そこで会ったのよお」

〈主人公〉

「！」

主人公、驚いて息をのむ。

『K G I』とは『K G I医療センター』の事であると即座に気づき、それが七緒の母親の検査入院と結びついたからだ。

入院の件を打ち明けられたあの日、主人公は病院名までは聞かなかった。

だが、状況から見て『七緒の母親の入院先は、K G I医療センターである』と考えられるのではないか。

〈涼羽〉

「はっと息をのんで驚く。

『K G I』を『K G I 医療センターの略称である』とすぐに気づき、七緒あるいはその家族が病気なのではないかと察したので」

K G I って……」

〈美津子〉

「【涼羽が『K G I』という単語を聞き取れなかったのだと、勘違いしている。

なので『K G I』をゆっくりと丁寧発音する。そうすれば伝わると思っている】

K G I・K G I 医療センター。

知ってるでしょう？」

〈由希乃〉

「【美津子に話しかけている。

真面目で丁寧かつ、落ち着いた『仕事モード』で。

特に由希乃は、七緒が通院しているらしいという情報自体、初耳。

『おそらくそうなのではないか』と思っていたが、いよいよ確信を得られそうで、慎重になっている」

あの、恐れ入ります。

【仕事モードなので、一人称が普段の『あたし』から『私』になる】

私達、実は全員七緒さんの友人なんです。

でも、お母様の手術の件は初耳で。

よかったらその時の事、詳しく教えていただけませんか」

〈美津子〉

「少し驚いて。

由希乃の説明から、主人公・七緒・涼羽・由希乃の関係を理解したので。

『それなら、ここにいる三人全員に説明しなくちゃ』と知っている。

また『そのためにも、知っている事はすべて伝えよう』と考える」

あら、そおなのお。

じゃあ。知ってる事お話するわね？」

〈主人公〉

「……はい。お願いします」

主人公、涼羽、由希乃、一度顔を見合わせたのち、美津子に丁寧に頭を下げる。

もしかすると美津子は、今自分達が最も知りたい事を知っているのかもしれない。そう思ったのだ。

〈美津子〉

「説明を始める。

しかし、すべてを丁寧に伝えようとするあまり、重要度の低い情報も話してしまう」
月曜日のお昼頃かしら。

病院の中のコンビニで、偶然会ったの！

それで『どうしてここに？ どなたか入院してるの？』って聞いたら、今お母さんが手術中だって言うじゃない。

「少し申し訳なさそうに。

本来ならもう少し話を聞きたかった。

だが、ここで七緒が持っていた院内用のPHSに着信があった。

これによって七緒は看護師に呼ばれ、美津子とは話せなくなってしまったのである」
そこでお別れしたから、それ以上は知らないんだけど……。

「少し間をあけてから。『だから今日も、主人公なら何かを知っているのではないかと思つて、話しかけたのだ』と伝える」

だからねえ？ ずっと気になってたのよ。

「『あなた達、どうなったか知ってる？』と言いかけて、止める。

由希乃にたった今『自分たち三人は、七緒の母親の手術の件は初耳だ』と説明されたの

を思い出したので」

あなた達、どうなったか……。

あ。……ごめんなさい。

【申し訳なさそうに三人を氣遣って。

熱中すると、すぐ忘れっぽくなる自分を申し訳なく思っている】

あなた達も、今知ったんだものね。こんな事聞かれたって、わからないわよねえ」

しかし話を聞き終えた時、三人は言葉を失う。

それは、七緒の不可解な足取りの真相を、こんな形で知らされたからだけではない。

七緒がこの三日間、どのような気持ちで過ごしていたのか。それを想うだけで、言葉が出なくなってしまったからだ。

〈由希乃〉

「【穏やかに落ち着いて、三人を代表してお礼を言う。

残る二人が、シヨツクのあまり無言になっているので】

いえ……とんでもないです。教えていただけで、本当にありがたいです」

〈美津子〉

「美津子なりに考えて、今後自分にできそうな事を述べる」

けど、ご家族が手術されたんなら、しばらく七緒ちゃんも通うはずよねえ。
またK G Iで会えたら、自分で聞いてみるわね。

【優しく丁寧に。落ち込んでいる三人を気遣うように】

お時間ありがとう。じゃあまたねえ？ 七緒ちゃんに、よろしく伝えて頂戴ね」

〈由希乃〉

「穏やかに落ち着いて、丁寧に敬礼を言う」

はい！ ありがとうございました！」

〈主人公〉

「ありがとうございました……！」

〈涼羽〉

「少し慌てて。事態に衝撃を受けるあまり、お礼を言うのがワンテンポ遅れたので
ありがとうございました！」

こうして美津子は去っていき、三人は再び顔を見合わせる。

ためらう気持ち、この件を七緒が隠したがっている以上、自分達は手を引くべきなのではないかという気持ちは、おそらく全員にあった。

〈由希乃〉

「二人に『これって、月曜日学校を休み、火曜日教師と話し込んでいたのは、手術の件があったからではないか。アルバイトには、手術後でもかろうじて来られそうだったから、出勤したのではないか』という気持ちで声をかける」

……ねえ」

それでも、このまま黙っている事はできない。
きっと全員がそう思っていた。

〈涼羽〉

「【由希乃に返事している】
はい。」

【二人に対して、自分の意見を伝える】

あの。これって……月曜日、なーちゃんはお母さんの手術の為に休んだって事ですよね。
だったら、土曜日遊園地でかかってきた電話も。

【『この事』とは『手術の件』という意味】

もしかして、この事だったんじゃないですか？」

〈主人公〉

「そういう事に……なるかもしれない」

〈涼羽〉

「【きっぱりと。力強く、二人に自分の意見を伝える】

私は、そうだと思います。」

【このように、自分の意見を伝えた上で、最終的な決断は主人公にゆだねる。

『今、七緒と最も近いのは主人公であり、彼女の意向を聞いた上で、自分と由希乃は行動するべきだ』と知っているので】

先輩……。どうしますか。

これからどうするか……先輩が決めていいと思います」

一度フェードアウトする。

SE 4 駐車場の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【▲1　まで流し続ける】

数時間後。二十一時過ぎ。

場所は『バアドモール　鵠中央店』の地下駐車場。

主人公は今、ここで由希乃が戻ってくるのを待っている。

あの後三人は話し合った結果『真相を知るためにも、主人公と七緒が、一対一で話し合える場を作る』事に決めた。

だから、まず主人公と涼羽は家族に状況を打ち明け、遅くなると伝えて。

涼羽は七緒の退勤直前である二十時半ごろまでは主人公達と一緒に過ごした上で、由希乃に送ってもらう形で帰っていった。

由希乃は『ご家族にも事情伝えるし、あたしもご挨拶するから、一緒に残らない？』と提案した。

だが涼羽は『今の私はどうしても、なーちゃんより先輩の側に立っちゃいます。きっといるだけで、なーちゃんのプレッシャーになりかねません。私だけどこかに隠れてるんだったら、それはもう家にいるのと変わらないし……だから、今日はいない方がいいと思う

んです』と、固辞したのだ。

涼羽がそのようにした気持ちは、主人公にはわかるようで、わからない。

だが、涼羽なりのベストの選択なのだろう。そう思うと、それ以上引き止める事はできなかった。

こうして涼羽は帰宅し、主人公は『そろそろ由希乃が戻ってくるだろう』という段階で、先ほどまで三人一緒に食事していた店から出た。

そして今、一人駐車場で由希乃を待っているという訳だ。

くしくもこれは、美津子に話を聞いてから、初めて一人で過ごす時間でもあった。だから主人公は、改めて思う。

あー。怖いな。帰りたい。

正直、今すぐ逃げ出したい。

考えてみれば。ていうか、考えてみなくても。

この三週間、わたしの人生には試練が多すぎたよ。

むーちゃん失踪とか、人助けミッション同時に五件発生とか。

桐生の突然すぎる告白とか。クレーマーおばちゃんの張り手とか。

いきなり『一晩一緒に過ごしましょう♥』とか言われるし。

恋を自覚して、キラキラの毎日が始まったかと思ったら、告白する前にザックリふられ

るし。

非モテ陰キヤのか弱いハートでは到底耐え切れないような事が、ちよつと起こりすぎたと思うんだよな。

その上、むーちゃんはまだに消息不明だしさ。

……桐生だって、会えた所で話してくれるかどうか、わからない。

今、必死の想いでここに居たって、それすら全部無駄になるかも知れないんだ。

……でも、桐生に会いたい。

会ってもまた冷たくされるのかもしれないのに。

『何しに来たの？』って言われるだけかもしれないのに。それでも会いたいよ。

だってこんな事になって、初めてわたしはわかったんだ。

好きな人に『好き』って『会おう』って。『一緒に居よう』って伝える事が、どれだけ怖くて勇気のいる事か。

わたしバカだから『陽キヤのやる事なんてわかんないから』とか思って。これまで桐生の気持ちを、ろくに理解しようとして来なかった。

いつも桐生が何でもない事みたいにな、沢山の犠牲を払って、沢山の事をしてくれてたから。

流されてるふりして、『しょうがねえなあ』みたいな顔して『おう』とか言っていれば。他には何も良くなかったから、わからなかった。

でも今は、桐生がどんな思いでわたしと居てくれたのかわかる。きっと沢山緊張して、不安な気持ちも抱えながら、そばにいてくれたんだってわかる。

だから、ここで終わりたくない。

もう一回ちゃんと桐生の気持ちを聞いて、それから、自分気持ちも伝えたい。

たとえそれが、完璧な答えには程遠くても。自分なりに、一番いいと思う事をしたいんだ。

そう思っていると、足音が近づいてくる。

由希乃だ。どうやら、運転中に主人公に気づいて、近くに駐車してくれたらしい。

メッセーじで『駐車場のどこそこにいる』と呼び出してもいいのに、本当に丁寧な人だと主人公は思う。

だから、すぐさま駆け寄っていった。

SE5 由希乃の足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【少しエコーがかかる】

▲ ボイス加工あり

「だんだん近づいてくる」

「少しエコーがかかる」

〈由希乃〉

「【穏やかに落ち着いて。

主人公に小さく手を上げて声をかける】

おっす。ただいま送迎任務完了しました。間に合ってよかったあ」

SE 6 主人公の足音

「最初から最後まで流す」

「少しエコーがかかる」

〈主人公〉

「お疲れ様です。あ。すうの家、ちゃんとわかりました？」

SE 7 二人の足音

「最初から最後まで流す」

「少しエコーがかかる」

二人、由希乃の車に向かう形で歩き出す。

七緒と由希乃は、普段駐車で待ち合わせる事が多いらしい。

それならば『主人公と七緒が話し合う場所は、どこかの店よりも、由希乃の車の方がいい』『その間、由希乃は席を外す』と、三人で決めたのだ。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「うん。久我ちゃんナビうまいからすぐ着いたわ。

【感嘆して。久我家の立派さについては主人公と七緒から聞いていたが、想像以上にすさまじかったのだ】

噂には聞いてたけど、あの子ん家（ち）すごいね！

豪邸でビビったし」

〈主人公〉

「ははは。わたしも最初に遊びに行った時はビビりました」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「【涼羽からの伝言を伝える】

後（あと）。あんたによろしくってさ。

『ずっとメッセ待ってる』って」

〈主人公〉

「……ありがとうございます」

そうだ。ここまで協力してくれた由希乃と涼羽の為にも、主人公はベストを尽くさなければならぬ。

七緒との関係は、七緒と二人だけで作ったものではないからだ。

二人、由希乃の車の前までたどり着くと、車の側面によりかかる形で会話を続ける。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「**状況を整理する**」

で。話を総合するときあ。

なーちゃんのお母さんは先月から体調崩してて。

あんたが泊まりに行った日には、もう検査入院してた。

けどなーちゃんはあたしとか久我ちゃんを心配させたくなくて『秘密にしてほしい』
って頼んだ。

だから、あんただけがこの事を知ってた。

ここまではあってる？」

〈主人公〉

「……はい」

▲ **ボイス加工あり**

「少しエコーがかかる」

〈由希乃〉

「けどなーちゃんは、あんたにも手術の事は秘密にしてて……。
月曜、立ち会いの為に学校休んだ。」

そしたら、病院でさっきのおばあちゃんに会って。

それから何食わぬ顔で、バイトに来た。

って事だよね」

〈主人公〉

「……そうみたいです」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「苦笑いして。

以前は七緒のこのような人柄を『秘密主義』だと捉えており、淋しくもあった。

だが、今では『単なる甘え下手なのではないか』と思うようになってきたので。

『そんなん、言ってくれりやいくらでも助けたのにさ』とは『困った事があるなら、相談してくれればいくらでも協力したのに』という意味」

ははは。あの子ってほんと秘密主義っつーか、甘え下手（べた）だよね。

そんなん、言ってくれりやいくらでも助けたのにさ。

【少し間をあけてから。

『まあ、若い頃の自分も似たようなものだった。だから、人の事は言えないな』
「ている」

まあ、なーちゃんらしいけどね」

〈主人公〉

「……そうかもしれませんね」

主人公、思わず由希乃につられて笑う。

果たして何が『七緒らしい』のか。

由希乃よりもはるかに付き合いの浅い主人公が、そんなものを理解できるのか。

そう言われてしまえばそれまでだったが、不思議とわかる気がしたのだ。

たとえば、医務室での事だ。

七緒はしきりに『大丈夫』『こんな事は慣れている』と言い、自分よりも主人公を気にしていた気がする。

母親の検査入院の話をした時も『大した事ない』と言い、電話口で暗い声をしていた時も、主人公が心配すると『元気だ』と誤魔化した。

その時主人公は心配しつつも、深く追及できなかった。

だが、思えばあれば『大丈夫』でも『慣れている』でもなければ『大した事はない』は

ずもない。当然『元気』でもなかったのだろう。

その延長線上に手術の件があるのなら、それは納得がいく気がした。

▲ ボイス加工あり

「少しエコーがかかる」

〈由希乃〉

「よし、じゃあ、ここまではわかった。

そしたら、最後に一つ確認」

〈主人公〉

「はい？」

そんな事を考えていると、ふと由希乃が尋ねる。

一体なんだろう。不思議に思っていると、由希乃は奇妙な事を言い出した。

〈由希乃〉

「あんたってさあ。なーちゃんの事ほんとに好き？」

〈主人公〉

「え？」

だから、言葉に詰まる。

しかし由希乃は、真剣に主人公を見ていた。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「【補足する。先ほどの言い方では不明瞭で、意図が伝わらないと気づいたので】

いや、好きな事は知ってたんだ。

でも、あんたいい子じゃん。

【主人公が美津子に道案内した件と、主人公がスーパーで七緒を助けた件を指して言っている】

困ってる人見たら助けちゃうし。

【主人公が由希乃に『七緒を遊びに誘ってほしい』と頼まれ実行した件を指して言っている】

『頼む』って言われたら『いいよ』って言っちゃうでしょ」

〈主人公〉

「……それは……」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「『さっきのおばあちゃん』とは美津子の事」

あのおばあちゃんともさ。それで知り合ったし。

あたしのお願ひも引き受けちゃった。

【『いいな』とは『好ましい。魅力的だ』という意味】

あたしはあんなのそういうところ、いいな！って思うし。

な！ちゃんも久我ちゃんも。そういうあんなが好きで……あんなと居るんだと思う。
……でもね」

〈主人公〉

「え？」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「【落ち着いて、はつきりと】

いつも誰かの為に生きる事はないんだよ。

【落ち着いて、はつきりと】

これまでは主人公の事を『七緒の好きな人』としか捉えていない所があった。しかし今は主人公と七緒を、それぞれ別々の、自分の友人だと考えている。

だからこそ、あえてはつきり現実を突きつけ、冷たい表現をする」

あんたはなーちゃんの家族でも恋人でもない。

【『大変』というのは『助けを必要としている』という意味。】

由希乃は今『主人公は、いつもの癖で、本当は気が進まないのに、優しさや親切心、義務感から七緒を助けようとしているのかもしれない』と心配している」

あの子ん家（ち）が大変だってわかったからって。

自分から離れてったあの子を、追っかける義理はないんだよ。

【『だから、もしあんたが『ただ心配だから』って理由でここに居るなら。『それは恋愛感情じゃないかもしれないって』あたしは言いたい。あんた自身が、それを自覚しておく必要があるかも知れないと思うから』と言おうとして、途切れる】

だから、もしあんたが……。

【少し間をあけてから。

遠くから、七緒らしき女性が歩いてくるのが見えたので】

おっと時間切れだ。

【少し間をあけてから。優しく諭すように。

主人公に自分で考えてもらうためにも、これ以上は言わずに去る事にする】
じゃあ、今の話の答えは、なーちゃんと話しながら考えて。

……来たよ」

こうして心の準備もできなければ、由希乃の問いにも答えられないまま、その時がやってきた。

遠くから足音が近づき、主人公は由希乃の視線の先を見やる。

——七緒だ。

SE8 七緒の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【次の『七緒』のセリフとかぶせて流す】

「だんだん近づいてくる」

「少しエコーがかかる」

「▲2　まで流し続ける」

▲　ボイス加工あり

「少しエコーがかかる」

「『明るく穏やかに。『普段通りの自分』を演じ続けている。

土曜日のデートの話題を振られたくないの。

まだ主人公がいる事には気づいてない」

お待たせしましたー……。

すいません田中さん、今日も待っててもらっちゃって……。」

▲2　ここでSE8がストップする。

当初、七緒は主人公がいる事に気づかなかったらしい。

それは主人公が小柄すぎて由希乃の影に隠れてしまったからかもしれないし、主人公の着ている上着が、車の色にちよつと似ていたからかもしれない。

だから笑顔で近づいてきたが、主人公の存在を認めた途端、それは一気にこわばる。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「静かに愕然として。主人公がいる事に気づいたので。

笑顔が消え、表情がこわばる。

『しまった。田中さんにはめられた。油断していた』と思いつつも、それ以上に『あんなに冷たい振り方をしたのに、それでも先輩が会いに来てくれた』という事実には強い喜びを感じてしまっている。

なので、『すぐさま逃げ出す』『主人公の存在を無視して由希乃との会話をする』といった事ができない』

え……？ 何（なん）で？」

七緒が自分を歓迎していない。

そう思うだけで、主人公の胸は引き裂かれそうだ。

でも、主人公はこれを承知の上でやってきたのだ。

そう思って、今はこらえるしかなかった。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「【落ち着いて、あっさりと。自分を取り乱す事で、二人を邪魔してはならないので。

しかし、内心では心臓バクバク。『お願いなーちゃん。どうか『帰る』とか言わないで。お願いだから話をしてあげて』と祈るような気持ちである。

しかし、これを完全に隠して七緒に話しかける」

そいじゃあたしは、一階のコーヒー屋に居るから。

どうぞごゆっくり」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【驚いて、らしくもなく少し取り乱す。

由希乃の意図は察したが、それにしても去るのが早すぎるので】

あの。ちよっと。田中さん……!」

由希乃、七緒に腕を握られ、七緒を見る。

珍しい事をされて由希乃は意外に思うが、それでも動じずに伝えた。

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

〈由希乃〉

「【真剣に。年下扱いせず、同世代の友人と接するように話す。

七緒に誠実に謝罪した上で、自分の気持ちを伝える】

ごめん。なーちゃん。勝手な事ばかりして。

でも、聞いてくれるかな。

遊園地の件は、全部あたしが悪いんだ。

もし何か誤解してるなら、それはあの子じゃなくて、あたしのせいなんだよ。

だから……なーちゃんが今でもあの子の事、友達としてでも大事なら。

お願い。話ししてあげて、くれないかな」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【息づかいのみで表現する。

複雑な思いを飲み込むように、息を吸って、小さく吐く。

『二人で手を組んでやってくるなんて、卑怯じゃありませんか。これじゃあ、私に選択肢はないも同然ですよ』と指摘して怒れば逃げられるかもしれないと思うが、できない。

『先輩が、私の為にわざわざ時間を割いて来てくれた』『田中さんも、遊び半分で私達にデートをさせた訳ではない。たとえ、最初は多少野次馬気分だったとしても、今は私達の事を真剣に考えてくれているから、ここに居るようだ』とわかったのだ。

そんな二人を冷たく追い返したり、二人から無言で逃げ出したりする事など、できるはずがないと思ったので」

……っ。

【ほとんど聞こえない位の小さな声で】
わかりました」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

へ由希乃

「静かにお礼を言う」

ありがとう。じゃあ、また後で」

SE 9 由希乃が遠ざかる足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかっていく】

【少しエコーがかかる】

由希乃の足音が遠ざかる。

地下駐車場には主人公と七緒だけが残され、他には誰もいない。

閉店一時間前を切った平日のショッピングモールは、驚くほど静かだった。

「【少し気まずそうに】

……お待たせ、しました」

そんな中、七緒が小さく頭を下げ、近づいてくる。

由希乃の説得あつてか、話しだけはしてくれるようだ。

主人公はホッと息をつくとき、三日ぶりに七緒に話しかけた。

〈主人公〉

「ん。ありがと。時間くれて」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「少し気まずそうに。

『何の用だ』と冷たく言い放てば、主人公がひるんだり、委縮したりするだろう事はわかってる。

でも、できない。会いに来てくれた嬉しさが勝ってしまうし、ここまでしてくれた主人公に冷たくするなどできるはずもない。

なので、自分の気持ちを隠して接するので精一杯」

いえ、こちらこそ、わざわざ来て下さってすみません」

その会話は、やはりぎこちない。

だが、ここでひるむ訳にはいかない。

主人公は車の鍵を見せると、七緒を車に乗るよう促した。

〈主人公〉

「じゃあ。とりあえず車乗らない？ 鍵あるんだ。

ゆっくり落ち着いて話せるように、田中さんが車で話せて言ってくれたんだよ。
寒いし、乗ろうぜ」

▲ ボイス加工あり

【少しエコーがかかる】

「【気まずそうにしつつ 『確かに主人公の言う通りだ』 という感じで。

自分とはともかく、主人公を『秋の夜の地下駐車場』という寒い場所に、長時間居させたくないのだ】

あっ……そうですね。車で話しましょう。

寒いですもんね」

SE10 七緒の足音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【少しエコーがかかる】

SE11 主人公が車のドアを開ける音

【最初から最後まで流す】

【少しエコーがかかる】

SE12 七緒が車のドアを閉める音

【最初から最後まで流す】

【少しエコーがかかる】

二人、乗車する。

そうするのは、主人公はこれが二回目だ。

一回目にここに来た時は、近い未来、このような事が起こると思っていなかった。

もし二回目があるならそれは楽しく和やかな雰囲気で、当然由希乃も居るものだろうと思っていたからだ。

そうならなかったのは残念ではある。だが今は、七緒と居られる事に感謝したいと思った。

〈主人公〉

「三日振りだな。桐生、元気だった？」

なので主人公は、できるだけ何事もなかったかのように話しかける。

この三日間で主人公は、七緒と話せるのがいかに幸せな事なのかよくわかった。だからつまらない照れとか意地で、時間を無駄にしたくなかったのだ。

「【少し驚いて。】

主人公が意外なほど普通に話しかけてくるので。

七緒にとって、この対応は予想外だったので」

え？

【少し声が震えている。

主人公の対応に合わせて、何でもないかのように振る舞いたいが、難しいので。

『そうか。まだたった三日しか経っていないのか』と、主人公に指摘されてようやく気付いたので。

七緒にとって、主人公と話せないこの三日間はとても辛く、長いものだった。

その位主人公とメッセーシアプリでやり取りするのが当たり前になっていたし、特に手術中は非常に精神的に堪え、何度も『先輩に会いたい。話したい。先輩の声が聴きたい』と思っていたので。

結果的には耐えたものの、この日の、無意識に誰かに助けを求める気持ちちが『ちよつとした顔見知りである美津子に、現状を正直に打ち明ける』事に繋がったので」

はは。そっか。日、月、火（にち、げつ、か）で三日か。

まだそれしか経ってないんですね。

【何とか持ち直す。

『普段通りの桐生七緒』として対応しようとする」

元気ですよ？ お陰様で、何（なん）とかやっています」

〈主人公〉

「……そっか。月曜日は大丈夫だった？」

学校休んだって聞いたから心配してたんだ」

だが主人公は、これだけ普通に七緒と接しておきながら、これから、七緒が最も嫌がるだろう事をする。

七緒の事が好きで、会いたくて、これだけ怖い思いをしてまで待ち続けたのに。これから、七緒に決定的に嫌われるかもしれない事をするのだ。

「【落ち着いて。『想定通りの質問だ』と思っているので。

なので『嘘ではないが、本当の事であるとも言えない』事を言って乗り切ろうとする】
ああ。そうなんですよ。

【『ほら、あの』は『ほら、あの人は』の略】

ほら、あの。あの電話の人と会ってたんです」

〈主人公〉

「えっ？ その為に一日休むって、よっぽど何かあったのか？」

車内に、主人公の白々しい質問が響く。

だから主人公は、

……はは。我ながら『よくもこんな事聞けるな』って感じた。

こんなの、ほんとおかしいよな。

わたしは今、間違った事を、間違ってるってわかっててしてるんだ。

その癖『他に方法はない』なんて正当化しようとしてるんだ。

と自嘲する。

それでもやめるつもりはない。そうすると決めたからだ。

「『落ち着いて。『想定通りの質問だ』と思っているので。

なので『嘘ではないが、本当の事であるとも言えない』事を言って乗り切ろうとする。

あたかも電話の相手が『わがままな恋人』であるかのような口ぶりで」

そうです。

月曜、学校サボって会いに来てほしいって頼まれちゃって。

困っちゃいますよねえ」

〈主人公〉

「……なるほどね。確かにそれって、嘘ではなさそう」

「声がこわばる。

主人公がまるで『何が嘘で、何か本当であるか』を知っているような口ぶりなので」
え？」

そう言った途端、再び七緒の顔がこわばった。

できる事なら、こんな顔は見たくなかった。

見なくて済む方法だって、きつとどこかにあったはずだ。

これが恋愛ゲームなら、主人公のこの行動は、ベストとは程遠い。

それでも『じゃあ、やめましょう。リセットして、出会いからやり直しましょう』とは言えない。

今からでもベストに近づけるように、自分が一番いいと思う事を。それもできないなら、自分がしたいと思う事をするしかないのだ。

〈主人公〉

「桐生は月曜日、病院にいたんだもんな。」

電話の相手は、おおかた看護師さんとか病院関係の人かな。

田中さんが教えてくれたんだけどさ、全身麻酔使う手術って、家族の立ち合い必須なんだってな。

だから『学校サボって会いに来てほしい』って言われた。そうだろ？」

「【落ち着いているように見せつつも、内心非常に警戒して。

明らかに真相を知っている様子の主人公を警戒している】

どうして、それを」

七緒が、信じられないものを見る目で主人公を見つめる。

こんな探偵ごっこは、やはり気分のいいものではない。

七緒は明らかに困惑しているし、秘密を暴く側の主人公だって、ちっとも楽しくない。

もしかするとこの行いは、全員が不幸になるだけで終わるかも知れない。

主人公と七緒の関係どころか、七緒と由希乃、七緒と涼羽の関係にまで影響を及ぼすかもしれない。

そう思っても尚、主人公は続けた。

打ち明けた以上、もう元には戻れない。

最後まで自分の推理を続ける。それしかないからだ。

〈主人公〉

「……ごめん。ほら、この前会った美津子おばあちゃんいたじゃん。あの人にさっき偶然会ってさ。教えてもらったんだよ」

「『ああ……あの人が漏れたのか……』という感じで。

少し脱力して。主人公が自分を付け回した結果知った等ではなく、単なる偶然の結果、真相をつかんだのだとわかったので。

また、それは自分の油断が原因であつたのだとわかったので」

ああ……あのおばあちゃんから聞いたんですね……。

【持ち直したふり、余裕のあるふりをする。

『バレたところで、そんな事、大した事ではない』とでも言うようにふるまう」

そっか。なのに知らないふりするなんて、先輩ったらお人が悪いですね♪
すっかり騙されちゃった」

〈主人公〉

「ごめんな。わざとじゃないとはいえ、暴くような事して。

桐生はこの事、秘密にしたかったってわかってる。

……でも、どうしても確かめたくて。

お母さんはもう、大丈夫なのか？」

主人公、言いながら、自分のふてぶてしさが嫌になる。

謝っておきながら、追及の手は決してゆるめない。

『こんなやり方』と申し訳なさそうにしながら、もっとその『こんなやり方』を続けていく。

だけどこの道を選んだ以上は。主人公も腹を決めている。

質問するなら、はぐらかされないようにはつきりと。

『打ち明ける価値もない』と思われないように堂々とすべきだと。

それがなかったから、主人公は電話の時も、観覧車の時も失敗した。

そう思うからだ。

しかし、そう考えるとともに、主人公は気づく。

——そうだ。

仮にすう達が言った通り、桐生の『もう先輩を好きじゃなくなった』って言葉が嘘なら。

桐生は電話の時、観覧車の時。

他に言いたい事があつたはずだ。

……それは、もしかして……。

と。

「【落ち着いて穏やかに。

まずは『お母さんは大丈夫なのか？』よりも先に『暴くような事してごめん』について返答する】

ううん。いいんですよ。そもそも、先に嘘ついた私が悪いんですから。

【落ち着いて静かに、しかし真剣に謝る】

ごめんなさい。先輩。

【『あんな嫌な言い方』とは『あまりにもひどい一方的な態度かつ言い方で、主人公を振つた事』という意味】

私、あんな嫌な言い方したのに。

それでも手術の事知って、心配して来てくれたんですね。
すごく嬉しいです。

でも」

〈主人公〉

「え？」

主人公、驚いて目を見開く。

それを、七緒が今一度見つめる。

隣にいる主人公に向き直って、今日初めて、しっかりとこちらを見る。

誰もが憧れるような容姿の、素敵な女の子。

少し前の主人公は、この顔を見るだけで緊張して、不安になったものだ。

『自分などではとても釣り合わない』と、勝手に委縮していた。

でも、今は違う。

たとえ釣り合わない事実が変わりなかりうと、そんなのもう気にしていられない。

自分は七緒が好きだから七緒のそばに居たいし、できる事なら力になりたい。

そう思うからだ。

【穏やかに落ち着いて】

そういうの。もういいって言ったじゃありませんか。

私こういう、平気で隠し事とかする人間なんです。

先輩は検査入院の時も、すごく心配してくれてたのに。

『手術なんてない』とは『母親は手術をする予定なんてないし、検査入院も無事に終えて自宅で通常通り生活している』という意味」

私はその後（ご）について全然話さずに『手術なんてない』みたいな顔してた。そんな人、無理して付き合う価値ないと思いませんか」

〈主人公〉

「桐生。それは違うよ」

だから拒絶されても、すんなり言葉が出た。

自分の事を平気で無価値とみなす七緒に、はっきり反論できた。

〈主人公〉

「手術の事、結果的に言えなかったんだとしても。

それはわたしを、心配させないようにしてたからだろ？

田中さんに検査入院の事言えなかった時みたいに。

『これ以上心配かけたくない』って思ってたから、言わない判断をしたんだらう？」

「少しひるむ。凶星を突かれたので」

……え？

「泣きそうになるが、多少無理してでも持ち直す。

『主人公の主張は誤りである』と押し通さなくてはならないので。しかし、多少苦しい反論になる」

違わないです。

私は。先輩とはそこまで仲いい訳じゃないし、もう、好きじゃなくなったから。言う必要ないって思っただけですから。

【この主張は、自分でも無理があると感じている。なので、話題をすり替える。

『手術は成功したし、退院の日程も決まった。だから、もう心配する必要はない』と伝える事で、話を終わらせようとする。

これについては真実だ。だが、それでも『露骨な話題のすり替えであり、主人公を追い払う理由としては苦しい』と、七緒自身自覚している」

それでも気になるんでしたら、今度はちゃんと本当の事を言います。

手術は成功しました。

お母さんはまだ入院してますけど、木曜日に退院するってさっき電話がありました。だから安心して、もうお帰り下さい」

〈主人公〉

「……そっか」

「少しホツとして。

主人公が諦めて帰ってくれるのではないかと思ったので
そうです。もう大丈夫なんです。だから」

〈主人公〉

「ううん。まだ帰れないよ」

「え……?」

〈主人公〉

「だって桐生、まだ嘘ついてるから」

きっぱり言い切ると、七緒の瞳が揺れた。
自立した女の子。器用な女の子。

自分よりもずっと大人っぽくて、色々な経験をしている女の子。

主人公はずっと、七緒をそう思っていた。

確かにそれは間違いではない。だけど、それだけでもない。

七緒には他にも、秘密主義の癖に嘘が下手で、強情な割に隙が多いところがあって。

素直で正直なふりをして、そうじゃない自分を隠して。色んな事を、一人で耐えようと
している。

そんな女性なのだと、今の主人公はわかっているのだ。

主人公はそんな七緒がいておしいし、想像よりもずっと不器用で、上手に生きられない
彼女の味方になりたい。

……だが、そもそも七緒にここまで無理をさせたのは誰だろう。

七緒の母親？

由希乃？

違う。主人公だ。

主人公が、もっと早く気持ちを伝えていれば。

言いたい事を言えずにいる七緒に寄り添って、辛抱強く話を聞こうとしていたら。

このような事にはならなかった。

主人公の至らなさが、この結果を招いたのだ。

「少し声が震えつつも、きっぱりと。

『嘘をついていない』と、嘘をついているので。

七緒は今、主人公が指摘する『嘘』とは『七緒はもう主人公を好きではなくなった』という件についてだと思っている。

なので、何が何でも譲らない気にいる」

もう嘘なんて、ついてません」

〈主人公〉

「ついてるよ。

桐生はずっと、お母さんの事『言うつもりがなかった』んじゃない。

ずっと、言おうとしてくれてたんだ。

電話の時も、観覧車の時も。

……なのに、どっちの時もわたしが気づかなかった。

『桐生が『元気』って言うならそうなのかな?』って。

『『忘れちゃった』って言うなら忘れたんだろうな』って。

ちゃんと聞かずに話を終わらせちゃったんだ。

だからわたしにも責任はある。桐生のせいじゃないよ」

「【息づかいのみで表現する。

驚いて息をのむ。

まさか主人公が、この件を指摘するつもりで『嘘をついている』と言ったとは思わなかった。また、指摘の通りなので」

……！

【言葉に詰まる。痛いところを突かれてしまったので】
それは……」

〈主人公〉

「……そうだろ？ そうなんだろ。

だから桐生は、わたしに相談できなかったんだろ？」

「【息づかいのみで表現する。

自分を落ち着かせようと、息を吸って、小さく吐く】

……。

【落ち着いて、穏やかに。

主人公が七緒を責めるどころか、自分に責任があると捉えているので。
見ていられず、そつと否定する。

また、主人公の主張を認めた上で、さらに嘘を重ね、主人公を追い払おうとする」
たとえ先輩の想像通りだったとしても同じです。

私は電話の時も観覧車の時も、言いかけておいて、結局手術の話をしなかった。

【『それは、先輩を信頼していなかったから』と嘘をつこうとするが、途切れる』
それは」

〈主人公〉

「……ごめんな。わたしがあの時、もっとちゃんと聞こうとしてれば。

桐生は一人で病院に行くなんて事にならなかった。

わたしには無理でも、すうとか、田中さんには相談できるようになってたかもしれないのに。

ごめん……」

主人公、話しながら涙があふれてくる。

七緒をこうも孤立させてしまったのは自分だ。

そう思うと申し訳なくて、ふがいなくて。悲しくてたまらなくなったのだ。

だが、これでは遊園地の時と同じだ。

泣いても何も解決しないし、かえって七緒を困惑させるだけだ。

なのに、こんな時主人公は泣いてしまう。

まったく、つくづくわたしは弱い人間だ。

こんなわたしだから、桐生は頼れなかったのかもしれない。

だから今すぐもっとしっかりするべきだ。

しっかりするべきなのに——……。

そう思えば思うほど止まらず、制服のスカートの上に、いくつも涙の粒が落ちていく。

「【完全に虚を突かれて。

主人公が泣き出したので」

えっ？

「泣きそうな、震えた声で。

主人公に対して『これはずるい。こんな時に泣くなんて卑怯だ』と思うが、それ以上に主人公の事が心配でならない。

これまでずっとそうだったように、いつも他人の事ばかり考えている主人公の事がいとおしくてたまらなくなってしまう。

また、自分も感情を引きずられて、悲しくなってしまうたので」

どうして、先輩が泣くの……。

優しすぎますよ……。

「ここから※マークまで、だんだん、抑えていた感情があふれ出してくる。

最初は『少し涙声』程度で。そこからだんだん『涙をこらえきれない様子の声』になる。涙を何とかこらえたいが、すでに難しくなっている。

七緒は今日も、本心を隠し、冷たく振る舞う事で主人公に嫌われるつもりでいた。

なのに実際に主人公を目にするとまるでそれができず、主人公に対してずっと言いたかった本音を、ついに言ってしまう」

だから嫌だったんです。私。

先輩は優しいから、私が困ってるってわかったら、きっと来てくれる。

私の事別に好きじゃないのに、絶対そばに居てくれる。

私、そういうのが嫌だったんです。

だってそれじゃ、先輩はずっとご自分を犠牲にする事になる。

放っておけないから。

心配だからって。

ずっと私に付き合う事になっちゃう……。」※

悲鳴のような声で、七緒が言う。

先ほど主人公が誰かに言われたばかりの事を、同じように繰り返す。
だから主人公は大きく息を吸って吐き、それから口を開いた。
それは、先ほどの由希乃の質問に対する回答でもあったからだ。

〈主人公〉

「……そうだな」

「泣きそうな声でたずねる。

主人公がこの件について認めるとは思わなかったのだ」

……え？」

心臓がどきどきする。

やっと四文字口にしたただけなのに、もう逃げ出したくなる。

〈主人公〉

「確かに桐生の言う通りだ。

もし目の前に困ってる人がいたら、わたしは桐生じゃなくても助けるし、時間とかも使
っちゃうと思う。」

それは否定できない。

ていうか、さつき田中さんにも同じ事言われたし」

「泣きそうな声で笑う。主人公ならそう言うと思っていたので。

また、由希乃からも同様の指摘を受けたと聞き『つまり主人公は、七緒と由希乃の二名に同じ事を注意されて、考えを改める気になったのかもしれない。だから認めたのかもしれない』と思ったので」

はは。そうでしょう？

先輩ってば、田中さんにも同じ事言われてたんですね」

〈主人公〉

「でも」

だけど、主人公は続けた。

由希乃の指摘に凶星だと苦笑して、七緒にも同意されながら。
今日一番七緒に伝えたい事を、言った。

〈主人公〉

「それが桐生に関わる事ならなおさらだ。

それは、わたしが桐生の事を好きだから。

……だから、付き合わせてほしい。

桐生が秘密にしたいと思ってた事、隠してた事。

可能なら全部わたしは知りたい。全部知って、少しでも力になりたい。

桐生の事が好きだから。

わたしが一番力になりたい人は桐生だから。

だから、教えてくれよ。

わたし、桐生の事なら何でも知りたいんだ」

「泣きそうな声で反論する。

だが、内心では非常に慌て、混乱している。

まさか主人公がこのような事を言い出すとは思っていなかったのだ」

そんな……。

そんなの、本当にそう言えるんですか」

もうどれだけ七緒が疑ったところで、主人公は迷わなかった。

これが自分の答えだと、自信を持って言えた。

桐生七緒という、どこまでも自分自身を嫌悪し、悪いもののように扱う女性に。はつきりと『それは違う』と『あなたはとても価値のある人だ』と言える。

〈主人公〉

「言えるよ。好きじゃなかったら、ここへは来ない。

マジで迷惑がられるだけかもしれないのに。

お互いもっと嫌な気持ちになって終わるかも知れないのに、のこのこ会いに来ない。ただ会いたかったんだ。ただもう一度、桐生と話がしたかったんだよ。

だからここに居るんだ」

「泣きそうな声で反論する。

だが、内心では非常に慌て、混乱している。

まさか、主人公がここまで考えた上で主張しているとは思っていなかったのだからダメです。やめましょう。

せめて、もう少しちゃんと考えて下さい」

七緒が何度も首を振る。

それはまるで『受け入れられない』『信じられない』と言っているようだ。

想定通りのリアクションだ。

それほどまでに七緒の自己否定感強いのだろうし、それを打ち破るだけの事を、主人公はしてこなかったという事だろう。

そんな事はわかってるし、七緒が長い時間苦しんできた問題が、主人公がちょっと『好きだ』と言っただけで解決するなんて、みじんも思っていない。

信じてもらうには、たくさんの時間、たくさんの事をして、信頼を積み重ねる必要があるだろう。

そうするつもりで主人公は、今最初の一步を踏み出している。

「【混乱のあまり、これまでずっと胸に秘めていた本音を言いそうになる。

『先輩は、自分の事を好きだと言っている子を手放したくないだけです』『でなかったら私みたいな女、好きになるはずがないでしょう。同性だし、秘密主義で面倒くさい性格だし、家は貧しい。アルバイトばかりで、ろくに遊びに行けもしない。いつもヘラヘラ笑って取り繕ってるけど、本当は周りの人へのコンプレックスで一杯。あんなに優しくしてくれるすっちゃんの事さえ、本当は羨ましくてたまらないの。こんな私みたいな人間、愛されるはずがない。寄ってくる人は、私の顔が気に入ったとか、胸が大きくて体つきがエロくて好みだとか、連れて歩いたら自慢できそうとか、そういう人しかいないの。私の内面を好きな人なんている訳ないの。いたとしても、それは私の表面的な部分だけを拾って自

分好みに解釈して、別人みたいに美化しているだけなの』と言いそうになる」

先輩は、自分の事『好きだ』って言ってた子が急にいなくなつて。

ちよつと惜しくなつてゐるだけですよ。

でなかったら私なんか」

〈主人公〉

「……そっか」

主人公、小さく頷くと、もう一度口を開く前に一呼吸置く。

いよいよここからが重要だが、ここまで話してきて、なんだか気持ちが落ち着いた。

やっぱり言葉だけじゃ全然伝えきれない。そう確信したからだ。

主人公はこれまで、周りの人とも、実際に会った事のない人とも、言葉を大切にしてくコミュニケーションをとってきた。

だから言葉をととても重要な存在だと思つてゐるし、何事も、まずは言葉でのやり取りで表現するべきだと考へてゐる。

だから今日もここまで、十分力を尽くして、七緒に気持ちを伝えたいつもりだ。

だが、今回はそれだけでは納得してもらえないらしい。

それがわかつた以上、ここからは、それ以外の方法でも想いを示すしかない。

そう思ったら急に冷静になれて、覚悟が決まったのだ。

主人公、一歩分七緒側に身体を寄せると、こう言った。

〈主人公〉

「よし。わかった。

じゃあ。今からわたしは桐生にキスします」

「【驚いて。まさか、そう来るとは思っていなかったのだ】

※コミカルな印象にはならないようにお願いします

えっ？」

七緒が、またも信じられないものを見る目でこちらを見ている。

それはそうだろう。主人公自身も驚きだ。

こんなのとても、自分とは思えない発言だと思っている。

SE 13 主人公が七緒に近づく音1

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「無理矢理するのはよくないからな。だから言ったぞ。

という事です。

嫌だったら全力で逃げて。

そしたら、わたしももう諦めるから」

……いや、ここまで言ったところで、やはりこれはとても自分らしい気もしてくる。

これまで見てきたフィクション達では、こんな時、登場人物はいつも強引にキスをして
いた。

相手の言葉を遮るように唇を奪って、無理やり想いを遂げていた気がする。

だけど、主人公にそんな事はできない。

それは七緒を尊重したいからでもあるし……そこまで大胆になれないからでもある。

「【落ち着いて対応しようとするが、できない。

あまりにも想定外の事を言われているので】

いきなり、何おっしやるんですか」

〈主人公〉

「だから、桐生は自由にして。

桐生がもし今すぐここから逃げて、わたしを拒絶したら。

わたしは『桐生に本当に嫌われたんだ』って理解して、桐生の前から消えるから。そしたらもう二度と会わない。すうとは変わらず仲良くしてほしいけど……。わたしからはもう二度と近寄らない。

よし。するぞ。するからな」

そしてこの、どこかしまらない感じ。

最大限勇気を出したのに、どうしても、なんだか間抜けになってしまうこの感じ。やっぱりこれは、非常に主人公らしい行動だ。

『他の人ならこうはならないだろう』という、なんとも言えないオリジナリティがある。

「【落ち着いて対応しようとするが、できない。

有無を言わせず、だがおっかなびつくり、主人公が近づいてくるので】
そんな……あっ」

だが、主人公は思う。

——だけど、もし桐生が、こんなわたしを今でもいいと思ってくれるなら。

SE14 主人公が七緒に近づく音2

【最初から最後まで流す】

「【※3回※】 荒く、少し早めのスピードで呼吸する。
困惑と期待が入り混じる。

『今ならまだ逃げられる』と思うが、とっくにそうするつもりのない自分に気づいてい
る」

はあ、はあ、はあ」

わたしは精一杯頑張りたい。

どんなに格好悪いところをさらしても、もう桐生にがっかりされる事だけはないように、
いつでも、一番いいと思う自分で居たい。

「【※1回※】 少し早めのスピードで呼吸する。
観念して、自分の気持ちを認める」

はあ……」

だって『好き』って、そういう事だろ。

その人のために、自分ができそうな事は全部する。

それが好きって事だと、わたしは思うんだ。

薄暗い車内で、影が二つ揺れている。

そのうちの一つは、一度退くような動きを見せる。

だが、それはすぐに止まり、今度は逆に受け入れるような姿勢を取る。すると、もう一つがゆっくりと近づいて行き……やがて、重なった。

「※1回※ キスされる。

唇を重ねるだけの軽いキス。

主人公からのキスを、静かに受け入れる」

ん……♡

「※1回※ キスする。

ほんのわずかに音がするキス。

今度は少し頭を動かして、自分からキスする」

ちゅっ」

〈主人公〉

「ん……」

——ああ。わたしって今、一体どんな顔してるんだろう。

『桐生をがっかりさせる事だけはないように』なんて思ってこんな事したけど。今、早速そうなってたら、どうしよう。

すごい残念な顔になってて、桐生が幻滅してたらどうしよう。

そう思っていると、ふと七緒と目が合う。

涙に濡れて湿ったまつげと、潤んだ瞳が、主人公をとらえる。

それにどきっとしていると、真っ白な左手が伸びてきて、主人公の頬に触れ……それから、唇が唇に触れた。

「【息づかいのみで表現する。

泣きながら、うっとり呼吸する。

一度唇を離し、ごく至近距離で、主人公を涙ながらに見つめる】

はあ……。

【※1回※ キスする。

ほんのわずかに音がするキス。

また、自分からキスする。もう嘘をつきたくないし、主人公に誤解されたくないの。

『逃げ切れず、仕方なくキスをした』のではなく『納得の上でキスを受け入れたし、もう今は、積極的にキスしたいと思っている』という気持ちを伝える』

ちゅっ。

【泣きながら、でもはつきりと】

そんな事言われて、逃げる訳ないでしょ。

【涙があふれてくる。告白された実感と、キスした実感がようやく湧いてきたので】
私だって、先輩が好きだもん……」

〈主人公〉

「……！」

【※2回※ キスする。唇を重ねるだけの軽いキス。

今の自分の言葉を裏付けるように、二回とも自分からする】

ちゅ。ちゅ。

「泣きながら、でも嬉しそうに。

主人公と目が合って、主人公も同じように、目を潤ませながら喜んでいるのが見えたので」

『逃げなきやキスする』なんて言われて、どこか行く訳ない。

【※1回※ 瞼にキスする。

泣いている主人公が可愛くて、涙に唇で触れるようなキスをする】
ちゅ。

【泣きながらかすれた声で。とても嬉しそうに】

大好きだもん……♡」

〈主人公〉

「桐生……！」

主人公が息をのむと、七緒が泣き笑いする。

やっと桐生が笑ってる。やっと桐生が、いつもの桐生に戻ってる。

主人公は、そんな気持ちでいっぱいになる。

「大きく息を吸ってから、涙をこらえて。

真剣に丁寧に告白する」

先輩。あなたが本当の気持ちを言ってくれたように、私も言います。
好きです。

あなたに会う前からずっと。私はあなたの事が大好きです。

「ここから※マークまで、涙が出てくる。主人公が自分の言葉を聞いて、再びボロボロと泣き出したので」

……これからは、本当の気持ちだけを言うから。

『もう好きじゃない』なんて嘘ついた事。

お母さんの手術を秘密にしてた事。

あなたを信じ切れなくて逃げようとした事、許してくれますか。

こんな私でも、あなたの彼女にしてくれますか？」※

〈主人公〉

「当たり前だろ」

だから、また涙が溢れてきてしまった。

主人公は七緒の事をもう『いつも笑顔で、いつも自分に好意的な女の子』なんて思っていない。

それでもできる事なら笑っていて欲しいし、仲良しで居たい。

だから、またそうなれる事が嬉しくて、とにかく泣けてしまったのだ。

〈主人公〉

「でなかったら、来るわけない。

もうとつくに許してるし、そもそも怒ってた事なんかないし。

すぐに言えなくてごめんな。わたしもずっと桐生が好きだったんだ」

『きっと、初めて会った時には、もう』

言いかけて、主人公はやめた。

『いつ好きになったか』という尺度では、一生七緒に敵わない。そう気づいたからだ。だから、代わりに主人公はもう一度顔を寄せる。

さっきまで人生で一度もした事がなくて、もしかすると一生しないまま終わるのではないかと思っていた事。

それを今は当たり前にしている。

それは何とも不思議な気分だったが……今はこうする事が、とてもしっくりくる気がした。

「【※1回※】キスされる。

ゆっくり、主人公からキスされる」

……ちゅっ。

「嬉しくて声が震える。

唇を離れた途端、どぎまぎした様子の主人公と目が合い、とても嬉しくなったので」

ああ……。

「泣き笑いして。とても幸せそうに。

今更恥ずかしそうにしている主人公がとても可愛らしいので」

ふふ。

「『私がレズビアンだとわかってても』という意味で言っている。

これまで七緒は、異性にしか告白された事がない。

同性愛者の自分はそれらを受け入れる事ができず、また、自分の性的指向を打ち明ける事もなかった。

しかし『中にはもしかすると、素直に言えば友人になってくれる異性だったかもしれない』と今では思う。

であるにもかかわらず、七緒は誰の事も信用できず、言えずに交際を断ってきた。

またずっと『同性愛者だとわかった途端、私を好きだという異性は全員離れていくに違いない。異性だけではなく、同性だってそうかもしれない』という、一方的な不信感を抱いて生きてきた。その結果、この表現になる」

私が。女の子を好きな女の子だってわかってても。

【このように他人を信じきれず、卑屈に生きてきた、己の人柄を卑下して言っている】
こんな性格悪くて、暗い奴だって知っても。

【『家が貧しくて、交際しても明るい将来を描きにくい相手でも』という意味で言っている。
とにかく家庭の経済事情がコンプレックスで、苦しく、辛かったのだ。

だがそれを母親に言える訳もなく、誰にも言えずに耐えてきたのだ】
うちが。お金きつくて、ずっとバイトしなきゃダメな位大変でも……。

【『それでも変わらず好きだと言ってくれる人なんて、居ないと思ってた』という意味で言っている。この絶望感がずっと、七緒を苦しめていたので】

それでも私の事欲しがる人なんて、いないと思ってた。

【泣いてしまう。

やっと己のコンプレックスを口にできた解放感と、これを受け止めてくれる主人公の存在がありがたくて、喜びの涙があふれてきたので】

うっ。うっ。ぐすっ……。

【※2回※ 息づかいのみで表現する。

会話を続けるために、大きく息を吸う。それから大きく吐き、涙を止めようとする】
はあ。

はああっ……。

【泣き笑いして。とても幸せそうに。

主人公を見つめて言う。

主人公が心配そうに七緒を覗き込み、まるで『自分が居る』とでも言うように、そっと手を握ってきたので。

それがとても可愛らしく、何よりも嬉しかったので】
ふふ。いるなんて。変なの♥」

〈主人公〉

「桐生……！」

主人公が、七緒の手に手を重ねる。

それを七緒が、もう片方の手も重ねて、そっと握りしめる。

「【※1回※ キスする。

主人公と同時に顔を寄せて、キスする」
ちゅ。

【優しく、そっと。とても幸せそうに】

大好きです、先輩。

ずっと……あなたのそばに、居させて下さい」

一度フェードアウトする。

とある年の秋。十月二十七日、水曜日。十七時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の政令指定都市。

天気は晴れ。気温は十八度程度。

比較的暖かい。

場所は、『バアドモール 鵜中央店』のBタウン三階。

主人公は今、七緒と共にフードコートに向かって歩いている。

水曜日は、週に一回の七緒のアルバイト休みだ。

これから涼羽、由希乃と合流し、四人で食事するのである。

そう……今度こそ、楽しい会が始まるのだ。

SE15 フードコート/environment 2

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【トラック終了まで流し続ける】

【SE1と同じ音だが、開始位置が変わっている】

【0—5秒ほど流して『七緒』のセリフ】

「【もじもじと恥ずかしそうに。

主人公があまりにも密着してくるので。

その密着ぶりが、完全に自分のキャパシティを越えているので】

あの……先輩……」

〈主人公〉

「ん？」

しかし、本日の主役である七緒は、先ほどから何だかもじもじしている。

何やら言いたい事があるらしい。

「もともと、可愛く照れる。」

『積極的な主人公と、照れている七緒』という、まるで、交際する前と逆の構図になる」
くつつきすぎ。じゃないですか？」

……はて。

確かに、言われてみればそうかもしれない。

主人公は今、七緒の右腕を己の左腕に絡め、さらに上から右腕で抱くようにし、それからその右手を、七緒の左手に重ねている。

要するに、歩きながらできる、最大限の密着ポーズをとっているのだ。

〈主人公〉

「んなこたない。これ位が適正だよ。」

だって桐生はモテるからな。

こうして、『桐生はわたしと付き合ってる』って事を、くどい位アピールしていかないと」

だが、たとえ七緒から指摘を受けたって、主人公にやめる気は一切なかった。

自分達は晴れてカップルになれた訳だし、であればそれを主張したいし。

それからこの三週間『接近はしてくるが、決して触れてはこない女』である七緒と一緒に居た主人公は、正直接接触に飢えている。

つまりはくっつきたい。ものすごくくっつきたいのだ。

しかし、ここまでしても尚、二人は道行く人に『ものすごく仲のいい友人関係』と思われるというのが、なんとも情けない。

がちちりと密着しているのは主人公ばかりで、七緒は困惑気味だからだ。

せめて、七緒の方からもしっかり腕や指を絡めてくれると、大きく違ってくるのだが……。

「『もごもごと恥ずかしそうに。そのくせまんざらでもなさそうに。』

完全に、交際前の主人公のようになっている」

いや、確かにそばに居させて下さいとは言いましたけど。

にしたって。

手を繋ぐか。腕組むか。どっちかだけでいいと思うんですけど……。」

〈主人公〉

「嫌か……？」

じゃあ、やめよつか。桐生の嫌な事はしたくないし……」

主人公、七緒の言葉に一気にしよげてしまい、

ああ……やっぱり早かったか……。

そうだよな。本当の桐生はとっても恥ずかしがり屋で照れ屋さんだもんな。いくら付き合ってるからって、わたし、早速距離感バグってたかも……。

と、へたりと肩を落とす。

交際が始まった事が嬉しすぎて暴走し、早速しくじってしまった気がしたのだ。

「【露骨に慌てて。

『フリ』などではなく、主人公が本当にしゅんとしてしまっているの
えっ！」

しかし、そうではなかったようだ。

主人公がそっと腕を離そうとした途端、七緒は露骨に慌て出す。

それから、さっきまであんなに恥ずかしがっていたのが嘘のように、自分からぎゅつと

指を絡めてくる。

「【即答する。】

主人公に自分の気持ちを誤解されたくないのです。

確かに交際を始めた途端主人公が積極的になり、七緒はとても嬉しいものの、急接近しすぎて心が付いて行っていないかった。

しかし、本当は七緒だって、主人公とべたべたしたいに決まっているので」
やっぱダメです。

【少し早口で】

このまま行きます。このまま行きましょ？」

〈主人公〉

「ほんとにか？」

だから主人公が思わず大きな声を出すと、七緒は大きく頷き、それから恥ずかしそうに微笑む。

そんな表情は、これまでほとんど見てこなかった。
だから、主人公は嬉しくなる。

これからは、今まで知らなかった七緒に、どんどん出会えるような気がしてきたからだ。だから二人はしっかりとくつくと、ゆっくりとフードコート内を進んでいく。

「少し間をあけてから。」

※マークまで、段々喜びがあふれていく。

ももごとした口調から、明るく嬉しそうな口調に変わって行く。

あえて口にする事で、主人公に確認しつつ、自分自身に言い聞かせる。

七緒自身、まだこの現実を信じきれないが、これからは少しでも自分に自信を持ちたいと思っているので。

また、そうするうちに、どんどん嬉しい気持ちになってきたので」

そう、ですよね。

私、もう先輩の彼女なんだから。

ちゃんとアピールしなきゃ、ダメですよね ♡ ※

【気を取り直して。

歩きながら、涼羽と由希乃が待っているだろう席を探している】

で、待ち合わせの席ってどこでしたっけ……」

〈主人公〉

「えっと。多分、わたしとすうがよく使う窓際の四人掛けの席。ただあそこ人気あるからさあ。もしかすると別の所に座ってるかもしれないんだよな。近くの席から見えていこうぜ」

「主人公の言葉に同意して。

『まあ、すぐに見つけられるだろう』という感じで
とりあえず行きますか♥」

〈主人公〉

「おう！」

こうして主人公と七緒は歩き出し、後は涼羽達と合流するのみに思えた。

「ふと思い出したように。

しかし、本当は言うタイミングを探っていた」
そうだ、先輩。

金曜日の、電話の後ね？

私、本当に先輩の夢見たんですよ」

〈主人公〉

「えっ！」

しかし、ここで七緒が突如意外な情報を出してくる。

当然初耳で、主人公は驚く。

という事は、金曜日に持ちかけたあの勝負は、ノーコンテストではなく、七緒の勝ちという事になる。

……でも、だったらなんで、桐生は遊園地でこの事を言わなかったんだろう……。

主人公がそう思っていると、すぐその答えがやってきた。

「妄想入ってたから、恥ずかしくて言えなかったけど。

本当に先輩に会ったんです」

〈主人公〉

「どどど、どんな夢だ？」

主人公、ドキドキしながら続きを待つも、ここまで聞いてもなお油断はできない事に気づく。

なぜならば『恥ずかしい』以外にも、まだ何らかの理由があるかもしれないからだ。たとえば、夢の中の主人公が何やら失敗をやらかすとか、残念な目に遭っていたから、七緒は気の毒に思っ言えなかったのかもしれない。

あるいはたとえばアライグマの姿で主人公が出てきたから、七緒は『これは主人公と呼べるかと言うと、少々怪しい』と思っやめたのかもしれない。そう思ったからだ。

「嬉しそうに。」

くすくす笑いながら、夢の内容を語る。

『妄想が入っている』と表現したのは『自分が働く店を、主人公と一緒に歩き、食事する』という事さえ、七緒には実現不可能な事に思っていたので。またそれは、自分ではなく涼羽のする事だと思っっていたので。

だが、その思い込みは間違いだとわかった。

ゆえに今後は未だ根強い涼羽へのコンプレックスも解消し、ようやく彼女と対等な友情が築けるのではないかと思っ始めている。

それはまた、由希乃に対しても同じだ。

七緒はずっと、由希乃にも屈折した感情を抱いていた。

自分よりもよほど苦しい境遇を乗り越え、家族と幸せに暮らしているだけでなく、自分に惜しみなく親切にしてくれる由希乃の事が、七緒はずっとまぶしかった。

『自分は田中さんのようにはなれないだろう。だって自分を受け入れてくれる人なんて絶対見つからないから』『同じ親切を返せないどころか、羨ましく思ってしまう自分がとても申し訳なく、恥ずかしい』と思っていたので」

私と先輩がね、このフードコート歩いてて。

先輩がね。こんな風に手を繋いでくれるの。

『桐生』って私を呼んで、一緒に歩いてくれるの。

ふふ。本当になるなんて、夢みたい……」

だが、それは違ったらしい。

だから主人公は、

……ホッ。よかった。

桐生の夢の中のわたし、とりあえず人間の姿はしてたみたいだ。

『桐生、わたしの事、小さくて面白い生き物だと思ってないかな？』って、実はちよっ

と不安だったからな。

いや、そう思われてる可能性は大いにあるけど。

段々人間として意識してもらえるようにならないとな。

だってこれからわたしたち、手え繋ぐとか、腕組むとか、キスするとかよりもっとすごい事も、してっちゃん予定なんだからさ……。えへ。えへへへへ。

などと考えていると、涼羽と由希乃が座っている席が見えてきた。

二人は主人公達を見つけるなりぶんぶんと手を振り、全身で歓迎の気持ちを表現してくれる。

▲ ボイス加工あり

【少し遠くで聞こえる】

〈涼羽〉

「【由希乃に話しかけている。

とても嬉しそうに】

あー！ 来ました！ 来ましたよ！

手え繋いでる！」

▲ ボイス加工あり

「少し遠くで聞こえる」

〈由希乃〉

「【涼羽に話しかけている。

とてもテンションが上がっている】

うお！ マジじゃん！

おーい！ 二人ともこっちー！」

「【とても明るく、幸せそうに】

じゃあ、行きましょっか、先輩♥」

〈主人公〉

「うん！」

だから主人公と七緒は、二人の居る方へ向かって歩いて行く。

沢山間違えたが、ようやくみんなが嬉しくなる道を歩いている。

そう思った。

「手を振って、涼羽と由希乃に呼びかける」

おい！ すうちゃーん！ 田中さーん！」

夕方の店に七緒の声が響き、涼羽と由希乃が座る席に、ちょうど光が入ってくる。

それはまるで幸せなラブストーリーのラストシーンのようで、主人公はとても幸せな気持ちになった。

ここでフェードアウトして終了。